



145号

2009/7/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷町 1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

http://wanli.web.infoseek.co.jp/

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



「祖父母の村にて」

ケニア・ニエリ地方オザヤ地区ルキラ村、2008年9月13日

撮影:ガスバレイ・ミグィ・キルス(アフリカンコネクション)

✿ ‘わんりい’145号の主な目次 ✿

北京雑感 (36)「北京の市場1」	2
媛媛讲故事 (15)「白蛇伝」I	3
私の調べた四字熟語 (34)「月下氷人」	4
中国を読む (60)「深夜特急I・II」	5
中国東北地方話 (1)「ハシバミの実」	6
物知りノート (10)「テニスと卓球の起源」	8
松本杏花さんの俳句集・余情残心より	9
アフリカとの出会い (34)「アフリカの子どもの日」	10
土の香りのモダンアート (1)金山農民法	11
スリランカ紹介 (30)「ジャフナ珍道中V」	12
7月の歌「幾度花落時」歌詞	13
ラオス・山からだより「G村滞在記」(1)	14
私の四川省一人旅 (26) 垂丁XIII	16
わんりい'掲示板	18

♪「中国語で歌おう!会」7月の歌 ♪

明るく楽しい江南のメロディ

jǐ dù huā luò shí (幾度花落時) (任光作曲:彩雲追月)

テレサ・テンの持ち歌の一つですが、日本でも「南の花嫁さん」の曲名でいろいろな人が歌ってよく知られたメロディです。(歌詞13p)

於:まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

7月17日(金) 19:00~20:30

指導:趙鳳英 (中国人歌手)

録音機お持ちの方は、ご持参下さい

● ご予約ください!

「中国で歌おう!会」8月の講座日は  
8月21日(金) 19:00~20:30 です

\*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局(☎042-734-5100)へお問合せ下さい。(体験無料)

2000年に初めて北京で生活した時、人々は、毎日の食材を近くの市場で買っていました。その市場は、日本なら棟割長屋形式で、15店舗も入れればいっぱいになってしまふ程度のスペースしかありませんが、壁を背にした台と、中央に楕円に配した台を置き、幅1m程(のスペース)を1軒分として商品を並べていて、店の数にすれば60店舗にもなりそうでした。

壁を背にした店舗は、肉屋や乾物屋、マントウ(中身の無い饅頭)、包子(日本で言う肉饅・餡饅等)焼餅等を売っています。豆腐屋さんもここです。因みに、北京の豆腐の販売はあまり水を必要としません。豆腐は、バット等に大きいまま置かれて、客の要求に応じて切り分けて、目方を量って売っています。以前、テレビの中国紹介で、豆腐を荒縄で縛って持ち歩いているのに眼を見張りましたが、ここで売っているのも、荒縄は無理かもしれませんが、ビニール袋に入れて貰って持ち帰れば、まな板の上まで同じ形で運べます。それほどしっかりしたお豆腐で、日本の木綿豆腐とは全く違う硬さです。日本の絹漉のような豆腐もあるにはありますが、ポロニアソーセージのようにケーシングされて、「日本豆腐」と呼ばれています。レストランのメニューでも「日本豆腐」の涼拌菜(サラダ)や炒め物が人気を博しています。

豆腐屋さんには、これら豆腐の他に、豆腐乾と呼ばれる、一見「押し豆腐の燻製」のように見えるものを売っています。形状も、厚さも、色も様々で、人々は煮たり、炒めたり、そのまま食べたりします。酒のつまみに最適だそうです。初めて見たとき、豆腐の燻製かと思いましたが、実際は、豆腐に味をつけて蒸し上げた物なのだそうです。保存性もよく、北京の人々のお気に入り食品です。

中央の楕円の台は、殆ど全部八百屋さんです。台の上に高く積まれた野菜は圧巻です。いろいろな種類が並んでいて見飽きません。この量を見ると、「中国はやっぱり食の国」と改めて感じてしまいます。東京では余り見かけない1m近くなるインゲンや、加茂茄子よりも大きな丸い茄子があり、直径2cm程で長く育ったヘチマも食用に売っています。きのこも種類がたくさんあるのですが、名前を訊くと、どれも皆「蘑菇」との答えが返ってきます。日本のように椎茸だ、シメジだなどとあまり区別しないようです。きのこの名前が無いのかと思いましたが、辞書にはちゃんと載っているので、八百屋さんが名前で区別しないだけだとわかりました。北京の八百屋さんでは、生椎茸でさえ「モウグウ」で済ませています。

客は、自分の好きなものを好きなだけ平箒に乗せて売り子に渡します。売り子は秤で計って、1毛(角)とか3毛とか値段を告げます。キュウリの隣に美味しそうなきのこがあるのでそれを箒に乗せると、それは隣の店の品物だったりします。それぞれのお店は、品揃えの一部に独自性を出し、競い合っていますが、同時に協力もしています。

日本の青果市場に行ったことはありませんが、時折テレビなどで見る機会があります。品物が床に積まれて、競りが行われているのを見ますが、集まった野菜は多い筈なのに、場所が広いせいか、それほど多いようには見えません。その点、中国の小売市場は、少ないスペースに野菜がうず高く積まれて、そんな筈は無いのに、日本の卸売市場より品物が多いようにさえ見えます。この市場とは別に、もう少し規模の大きな野外の市場でも、八百屋さんが集まっている場所では野菜類が山積みされて売られていて、北京の胃袋の大きさを実感します。

時折北京の郊外へ出かけることがあって、果樹園や耕作地を眼にすることがあるのですが、時期が悪かったためでしょうか、畑が作物で溢れているというような光景には出くわしたことはありません。それどころか、畑地は粘土質で、コチコチに固まっていて、日本の畑と比べて、これで耕作が出来るのだろうかと思ってしまいます。でも、市場に溢れる野菜を見ると、この辺りでも時期が来ればやはり緑に覆われるのでしょう。それに加えて、何と言っても北京は、南方の穀倉地帯が控えているのですから野菜売り場が豊なのも当然かもしれません。

ところが、最近の北京では、山積みにした中から好きな野菜を選ぶよりも、パック詰めにしたスーパーマーケットの野菜を買うのがトレンドになって来ました。フランス系のスーパーマーケット、カルフルが、北京では「家楽福」と呼ばれて、大繁盛しています。そこでは、果物などは山積みして量り売りをしてはいますが、野菜の多くはパックされていて、品質も決して良いとは言えません。それでも、人々は喜んで買って行きます。私は、そんな人々の生活を、ちょっと残念な思いで見えています。

八百屋さんという商売は、手っ取り早く始められるものの一つのように、ある日、突然、街中の道路わきに野菜を並べて商売が始まります。場所が便利で、品物が良いと、繁盛して固定客がつくようになり、そして少しずつ大きくなります。市場やスーパーが繁盛しても、街の小さな八百屋さんにもそれなりの存在感があって、頑張っているのです。



はるか大昔のことです。中国は杭州の、美しい湖で知られた西湖の「断桥」の下には仙界があり、そこで一匹の亀と一匹の白蛇が仙術の修行をしていました。ある年の春、二匹のもとに団子が一つ、橋から転がり落ちてきました。亀と白蛇はそれを食べよう奪い合いましたが、その団子は結局白蛇が食べてしまいました。

亀は非常に腹を立て白蛇と争いを始めました。亀も白蛇もすでに五百年に亘る修行を続けて来ていたのでもととの腕前はほとんど互角でした。しかし、白蛇は団子を食べてしまったので更に五百年分の修行の力が加わりました。実は、この団子は仙人の呂洞賓<sup>1)</sup>の仙丹だったのです。亀はどうしても白蛇に勝つことが出来ず白蛇に宿怨を持つようになりました。

その後のある朝、西湖の断桥の下から細い白い煙がゆらゆらと舞い上がると間もなく、その煙は白い衣装に身を包んだ美しい女性に変わり岸に上がってきました。白蛇は千年の修行の効果で人間に変わる力を得たのです。白蛇は自らに「白娘子」と名づけ西湖の辺りをそそろと歩き始めました。

西湖の風景はなんと綺麗なんでしょう。白娘子はその風光明媚な景色に心を奪われ、人間の暮らしにも魅力を感じて仙界に戻る気持ちがなくなりました。加えて白娘子の心の奥深くにはどうしても果たしたいという願い事もあり、しばらくは人間界に留まろうと心を決めました。

実は、白娘子がまだ何も出来ない小さい白蛇だった頃、蛇を捕る人に捕獲されて危うく殺されかけたところを牛飼いの少年に救われたことがありました。修行を積んで人間になることができれば、必ずその少年を探し出して恩返しをしたいと思っていたのです。南極仙翁<sup>2)</sup>の話では、その少年は西湖の<sup>あたり</sup>辺にいて清明

節に会えるということです。そのような訳で白娘子は西湖のほとりに住むようになりました。

ある日、白娘子が西湖の辺りをそぞろ歩いていると青蛇が売られていました。白娘子はとても可哀想に思い青蛇を買って自分の家へ連れて帰りました。ところがこの青蛇も本性は妖怪でした。白娘子に救われたことを深く感謝し、人間の姿に変身すると‘小青’と名乗り、白娘子の下女として仕えるようになりました。

清明節の日がきました。白娘子と小青は蘇堤<sup>3)</sup>に沿って歩いていたところ、俄かに雨が降り始めました。



二人は雨宿りをしたいとあたりを探しましたがなかなか良い場所が見つからず困っていると一人の青年が現れ、親切にも傘を貸してくれました。白娘子がその青年の顔をよく見るとなんとこの青年こそがまさに自分が無力だった時に救われた少年ではありません

か。恩返しのチャンスが来たことが白娘子はすぐ分かりました。

明日になったら傘をお返ししたいからと青年にいろいろ尋ねてみますと、青年は許仙という名前で、西湖の近くに一人で暮らしていることが分かりました。

翌日借りた傘を返すとそれをきっかけにして白娘子は小青を共に、回を重ねて許仙と会うようになり、一緒にお茶を飲んだり、西湖の景色を眺めたりしているうちに段々と三人は親しさを深めて行きました。

許仙はなかなかの美男子でありましたので白娘子は遂に許仙に恋するようになりました。(続く)

■注記

- 1) 呂洞賓<sup>りょどうひん</sup>: 中国道教の代表的な仙人である。八仙の一人である。
- 2) 南極仙翁<sup>なんきょくせんおう</sup>: 人間の寿命を守る神であり、福、禄、寿の中の一人・寿老人として知られている。
- 3) 蘇堤: 西湖を南北に貫く堤防。西湖の一景として有名である。

最近ミツバチの突然の大量死が問題になっています。そのことで農作物の受粉に影響が出ているからです。それに関して朝日新聞の「天声人語」の欄に次のような記事が載っていました。冒頭の部分だけを抜粋しますと、

「いまや死語に近いが、“月下氷人”といえは男女の間を取り持つ仲人役をさす。中国の故事に由来している。幻想的なその言葉を借りれば、果物や野菜が実を結ぶのに、ミツバチは不可欠の月下氷人なのだという」

昔から月下氷人は結婚の媒酌人役を指す言葉として知られていますが、由来とされる中国の故事とはどのようなものか、調べてみることにしました。

その前に例によってまず辞書を確認してみましょう。

三省堂・大辞林には次のように掲載されています。

**月下氷人**：(月下老人と氷人からつくられた語) 結婚の仲立ちをする人。なこうど。媒酌人。月下翁。

**月下老人**：(「続幽怪録」による。唐の韋固が旅先で月夜に会った老人から未来の妻を予言されたという故事から) 縁結びの神。なこうど。月下氷人。

**氷人**：(晋書策駘伝) 男女の仲をとりもつ人。仲人。月下氷人。[晋の時代、狐策が占いの名人策駘に、氷の上に立って氷の下の人と話をしたという夢の判断を求めた。策駘が「氷の上は陽、下は陰。したがって、この夢は氷が解けた頃、結婚の世話をする前兆である」と解いたところ、その占いどおり大守の息子の仲人を頼まれたという故事から。]

ところで読者の皆さんは何で“月下老人”や“氷人”を大辞林で当たってみたのか不思議に思われたでしょうか。実は小学館の中日辞典では“月下氷人”を直接引けず“月下老人”又は“氷人”として次のように掲載されています。そんな訳で“月下老人”や“氷人”を大辞林で索引すると上記のような説明があったという訳です。

**氷人**(bīngrén)：月下氷人、媒酌人

**月下老人**(yuèxiàlǎorén)：月下老人、月下氷人、

仲人、媒酌人。“月老”ともいう。唐代、韋固という人が月夜に老人が書物をひも解いているのに出あった。その書物を覗いてみたが1字も読めなかったので、老人に尋ねたところ、それは天下の人の縁組を記した本で、老人は縁組を司る神であることが分かったという伝説から。

“月下氷人”は“月下老人”であつたり“氷人”といわれたりしますがどれも意味は仲人、媒酌人のことであり、日本で専ら使われる“月下氷人”は“月下老人”と“氷人”を組み合わせたものかと思われま

さて、“月下老人”の由来を紹介した「続幽怪録」は唐の李復言により書かれたものですがその話をもう少し詳しく紹介しましょう。



唐朝の時に韋固という名の人が居りました。ある時彼は宋城というところに旅をしました。一日中街をぶらついて、とうとう夜になってしまいました。ふと見ると月光の下で一人の老人が赤いひもがはみ出ている袋に凭れかかって本を読んでいるのを見かけました。

韋固は大いに好奇心を持って老人にたずねました。「あなたは何の本を読んでいるのですか？」老人が答えて言いました。「この本は世の中の男女の婚姻のことが書いてあるのだよ」

韋固はそれを聞いてなおさら興味がわいたので、重ねてたずねました。「あの袋の中の赤いひもは何に使うのですか？」老人は笑って言いました。「この赤いひもは将来夫婦になる男女の魂を結ぶのに使うのだよ。例えば男女が仇同士であつたり、遠く離れていたとしても、この赤いひもで彼らの魂を結ぶだけで、夫婦になれるのだよ」

韋固はそれを聞いてとても信じられませんでした。老人は彼に冗談を言ったのだと思いましたが、やはり好奇心を捨てきれず、もう少し何かたずねようと思った時には、老人はすでに立ち上がり本と袋を持って、隣の米市という街の方へ歩き出しましたので韋固も老人について行きました。

米市の街に着くと、そこで彼らは三歳くらいの女の子を抱いた盲目の女が、こちらへ向かって来るのを見ました。老人は韋固に「あの盲目の女に抱かれた少女は、あなたの将来の妻ですよ。」と言いました。丁度その時、一人の気の狂った男がいきなり現れて、あっという間に少女の額のあたりを刃物でひ



と突きして逃げ去りました。それは一瞬の出来事で、幸い少女の命には別状はなかったのですが、気が付くといつのまにかあの老人は影も形も見えなくなっていたのです。

そのことがあって14年後に、韋固は素敵な婚約者を得ました。相手は相州の王奏<sup>おうそう</sup>という名の郡主の娘で、育ちも良く、美しい人でしたが、眉の間に小さな傷跡が有るのが気になりました。韋固は胸騒ぎがして王奏に「彼女の眉の間の傷跡はどうしたのですか？」とたずねました。

王奏は言いました。「話すのも腹が立つのだが、14年前の宋城でのこと、ある日保母が私の娘を抱いて米市という街を通りかかると、一人の気のふれた男が突然現れて理由も無く娘を刺したのだ。幸い命には別状がなかったものの、あのよう傷跡が残ってしまった」

韋固はそれを聞いて大変驚き、14年前のあの時の出来事がありありと頭によみがえってきたので

す。そして恐る恐る王奏に聞きました。「もしかしてその保母は盲目の女ではありませんでしたか？」王奏は驚いて言いました。「その通りだ、でもどうやってそのことを知ったのだ。」

韋固は大変に驚きしばらくは口もきけませんでした。やがて落着くと14年前に月下で老人に会ったことの一部始終を話しました。それを聞いて王奏はしばらくは本当かどうか信じられない様子でした。韋固は月下の老人の話が決して冗談などではなかったことがはっきりと分かりました。そして自分たちの婚姻は本当に神が定めたものだということが分り、以後、韋固夫婦は改めてこの婚姻を大切に思い、お互いを大事にしながら暮らしました。

この故事の言い伝えによって、人々は「婚姻は月下老人に赤いひもで結ばれることによって縁組が決まる」と信じ、以後媒酌人のことを“月下老人”、略して“月老”と呼ぶようになりました。

## 中国を読む(60)

### 「深夜特急1 香港・マカオ」「深夜特急2 マレー半島・シンガポール」

沢木耕太郎著 新潮文庫

旅にもセンスがあると思う。

一緒に旅をしていて「ああ、この人旅のセンスあるな」と感じることもあれば、旅行記を読んで感じることもある。旅行記を書ける人はたいていセンスのある人だ。同じ旅をしても、私が絶対すくいとれないものを、書ける人はごく自然に吸収し自分の経験として伝えている。

私には旅のセンスはまったくない。だから旅行の記録1つ書けない。それどころか、友人に「〇〇(地名)に行ったんだって? どうだった?」と聞かれても返事に窮する。旅をして、何を見、何を感じ、何を体験したのか。何も語れない。

「深夜特急」は全6巻。当然、抜群の旅センスで書かれている。著者は26歳のとき、「真剣に酔狂なことを」したくて旅に出た。デリーからロンドンまで地続きで行こうと決心したのだ。とはいえ、インドのデリーへ直行するのはもったいなく、寄った香港の魅力に魅せられて何週間も滞在することに。さらにマカオ、マレー半島、シンガポールへ寄り道ならぬ「寄り旅」をして、ようやく3巻目にしてインドの章が始まる。

でも、寄り旅をしたのはきっと偶然ではない。香港のパワーにやられて、マカオでギリギリの賭け事をし、マレー半島・シンガポールを経て、著者はようやく自分がなぜこの旅に出てきたのかを悟る。30歳を手前に、「何かが固定してしまうことを恐れ」逃げるように日本を出たのだと。

正直、この気持ちは、私にもとても腑に落ちる感覚である。入社したその日に「属することで何かが決まってしまうことを恐れ」て退社してしまう著者には負けるが、20代の私は、会社の机のなかに最低限の私物だけを入れて、いつ出て行くかを毎日考えていた。改めて、「そうか、無期限の旅に出ればよかったんだ」と本を読んでひとりごちた。

そして、はたと思い当たる。私には旅のセンスがない。英語さえ満足にしゃべれない。結局、旅に出たところで、何も得ることがなく帰ってくるしかない。

全6巻の旅が終わったときに、著者はどんな理由をもって決めるということに納得し、日本に戻るのか。旅のセンスがある人の答えが知りたい。(真中智子)



久しぶりに中国瀋陽へ郷<sup>さと</sup>帰りをした。持ち帰ったお土産<sup>みやげ</sup>はハシバミの実だった。

「おみやげ」とはいつでもその大半は自分で食べるためのものだった。自分のために持ち帰ったものをお土産<sup>みやげ</sup>とっていいのかわからずよく分からないが、それはさて置いて、私は辞書を調べるまではハシバミという日本語すら知らなかった。それは当然といえば当然のことで、ハシバミの実<sup>み</sup>は日本では滅多に売られていないので手に入れるのがなかなか難しいからだ。日本に長く住んでもう忘れかけた味になってしまっていたが中国に帰ったのを機に毎日食べ、すっかり病み付きになってしまい、とうとう何キロものハシバミの実を背負って日本に帰ってきた。

食べたことのない人にはその美味しさはなかなか分からないかもしれない。少し説明すると、ハシバミの実<sup>み</sup>は中国北方の山地の特産品でくるみに似たような硬い殻をもつ果実だ。乾燥した気候を好むので、湿度の高い日本の風土で栽培するのは少々難しいようだ。ハシバミの実の大きさは大体指の爪の大きさほどで、炒めて食べるとサクサクとした噛み応えもよくたいへん香ばしい。

ただ問題は硬い殻だ。中身を取り出すのにひと苦労する。歯が丈夫な人は殻を噛み砕いて食べるというが私のような歯が丈夫でない人間は、トンカチやペンチを使って殻をはずさなければならない。けっこう面倒だが、それでも一度食べ始めてしまうとなかなか食べるのを止められない。そして遂には病み付きになってしまう美味しさなのだ。

以前と比べると、昨今の中国ではハシバミの実の種類も消費する量もずいぶん増えているようだ。コンビニ店の一角を借りて、ハシバミの実を山積みにして売っている業者の姿もよく見かける。最近のハシバミの実<sup>み</sup>は昔のそれよりずっと大きく、10円玉の大きさもあるほどだ。訊いてみると、それはアメリカのハシバミの実だと説明された。

アメリカものというがおそらくアメリカ産ということではなくアメリカ種という意味だろう。その辺の詳細はよく分からない。中国人は一般的に舶来品が好きだがハシバミの実に限って言えば外国種より昔ながらの小粒のハシバミの実の方が今でも人気がある



ようだ。ハシバミの値段でも人気の差が伺える。アメリカ種の15元/斤(500g)に対して、中国古来の種類は30元/斤だし、瀋陽から北へ100 kmほどの開原地区産のハシバミの実ともなると、一斤は50元の店もあったりして高値が付く。

私は80歳の誕生日を過ぎたばかりの父親に訊いた。「開原のハシバミの実はどうしてこんなに高いのか」。冗談まじり口調で父親が「それは人間が収穫したものではなく、ネズミが採ってくれたものだからだ」と答えた。私はネズミが採ってくるなどという話など信じられないと思ったがしかし、父親が語ってくれたハシバミの実を採る名人の話は事実だ。

父親は若い頃、出張で開原に行ったことがあり、そこでハシバミ採りの名人に出会った。父親は名人がどのようにハシバミの実を採るのかを知りたくて名人と一緒に連れていってもらったことにした。

出発前、名人は三つの道具を用意した。空の袋、鉄鍬と干しトウモロコシの粒をいっぱい入れた袋だ。空の袋はハシバミの実を入れるものだとすぐ分かる。しかし、トウモロコシと鉄鍬は何に使うだろうか。父親は不思議に思ったが名人は何も説明せずに山へ向った。

季節は冬に近い秋だ。禿<sup>は</sup>げて荒れた山には木の实<sup>み</sup>がつきそうな植物はあまり見当たらない。が、名人はそんなことは気にも留めず、又、山に入ってもハシバミの木を探す様子もなく、ずうっと地上に何かを探していた。ときどき落葉を掻き分けて地面を用心深く調べた。とある場所へ来ると名人はあゆみを止めて鍬で地面を掘った。するとすぐ小さな穴が現れた。更に掘り続けるとその穴が長く伸びていることが分かった。名人は掘りながらときおり動きを止め、耳を澄まして何



かを聞いているようだった。今度は場所を少し変えて再び掘り始めた。又さっきと同じような穴が現れた。

こんな風にして数回掘り続けると、突然穴の奥からネズミが飛び出してきた。ネズミはキィキィと細い声で鳴きながら慌てふためいて名人の周りを跳び回り、また名人の足元と鋤との間を行き来した。時には名人の靴の上まで上がって何かを嘆願するような仕草さえも見せた。名人はネズミを傷つけないように注意を払いながら掘り続けた。しばらくして穴がぐうーんと大きくなった。

驚いたことに穴の底にはハシバミの実の山があった！なるほど、ここはネズミの貯蔵庫だ。名人はネズミに向かって、「ネズミくんよ、ごめんなさい。ハシバミをいただきます」と言い、空の袋をもってネズミの巣穴に身を屈め、ハシバミの実を袋に入れ始めた。袋がいっぱいになると名人は袋を父親に渡し、干トウモロコシの粒の入った袋を持ってくるように指示した。名人はトウモロコシの粒をハシバミの実があった場所に入るとネズミに向かって一拝してその場をあとにした。

次の目標を探す間に名人は父親に語ったそうだ。

「ネズミの巣の穴道は長い。最初に掘ったとき、ネズミは恐くて穴道の中を逃げ回った。ネズミは奥の巣穴に逃げてしばらくじっとしていたが、巣穴の近いところまで掘られたから危険を感じて巣穴から逃げ出したんだ」

「ネズミは人間を恐れないのか？」

父親はネズミが遠くへは逃げなかったことを思い出して質問しようとしたが、名人は続けて

「ネズミは本来なら人間を恐れる動物なんだがしかし、巣穴にあるのは越冬のために貯め込んだ食料だから、ネズミにしてみれば心配で心配でどうしても遠く逃げられない。ハシバミの実はネズミがあちこち探して集めてきたもので、冬を越えるための食料なんだ。ネズミは一番美味しいものを選ぶから、ネズミの巣穴から採ったハシバミはみなボリューム満点で、殻だけのものはまずないんだ」

なるほど、トウモロコシはネズミの越冬食と交換するためのものだったのだ。父親は納得したが、

「ネズミにトウモロコシをあげなかったらまたハシバミの実を集めるのか？」と名人に訊いた。「今頃はすぐ冬が来るから、越冬できる食べ物はもうないよ」「ネズミは越冬食がないと餓死するのか？」父親は重ねて訊いた。「ネズミは餓死になる前に自殺してしまうん

だ」と名人は答えた。「ネズミはY字型の木を探して、枝のあいだに首を突っ込んで自殺するんだ。人間の首つり自殺と似たようなことさ」。ネズミが自殺するという話を聞いた父親はびっくりしたそうだ。

この話は父親自らの体験を語っているので間違いがないだろう。開原のハシバミの実は鼠が採ったものだから美味しく値段も高いという理由だ。

けれども、動物の自殺話はあまり聞かないので、ネズミが自殺する話には疑問がある。それでネットで検索してみると食料難のために鼠が集団自殺をする話が出てきた。アメリカの話のようだ。しかしその話を否定する話もあった。人間は、自殺するのは人間だけの能力で、動物は自殺などできないと思っているのだが、地球の裏側にもネズミが自殺するという説があるなら、ネズミの自殺は或いは本当の話かもしれないと信じたい気持ちになる。

ということはハシバミの実を食べるのは鼠を死に追い込む恐れがあるということだ。ハシバミの実を食べる後味が悪くなる。しかし幸いなことにネットを続けて検索している内に、現在のハシバミの実は産地を問わずほとんど人工栽培したものでネズミの越冬食を奪うことはないようだ。

よかった！鼠くんも私も安心して美味しいハシバミを食べられるというわけだ。 (09/06/12 満柏)



満柏 画

## ⑩ テニスの起源

テニスの起源は非常に古く、紀元前15世紀頃のエジプトの壁画に宗教的な行為の一つとして<sup>1)</sup>このような球を打ち合う競技を行う人々の姿が描かれているのが発見されている。一説によるとテニスの起源は紀元前3000年頃までさかのぼるともいわれている。エジプトから古代ローマにレクリエーションの一つとして引き継がれたそう。

8世紀ころのフランスで現在のテニスに近い形になり、16世紀以降にはジュ・ドゥ・ポーム (Jue de paume) と呼ばれるようになった。ポームは手のひらの意味で、手のひらのゲームの意味だといわれている。

フランスでテニスが盛んになった理由は、イベリア半島から南フランスに進出したイスラム教徒が宗教的行為として行っていたものをフランスのキリスト教の僧侶が模倣した事から始まったといわれる。

昔のテニスのコートは、僧院の中の、四方は壁で上は傾斜した天井に囲まれていた。また、現在のものとは異なるラケット或いは手のひらでボールを打ち合っていた。時には手袋を使うこともあったという。

ボールは固形物(石など)を芯にして糸をぐるぐる巻き、皮で被った<sup>おお</sup>もので現代のものよりはるかに重く、弾力性は少なかったようだ。その後だんだんに屋外で行われることも多くなり、ラケットやボールに様々な改良が加えられて現在のスタイルが確立された。

1881年にはローンテニスクラブが設立され、1887年、ロンドンでアマチュアの大会として第一回ウィンブルドン選手権が開催された。

## ● 卓球の起源

卓球の起源はテニスとは対照的にその歴史は浅い。

19世紀後半にイギリスで生まれた。テニスの選手が雨でテニスが出来なかったため(外の日差しが強すぎて暑かったためという説もある)室内のテーブルの上でテニスのまねごとをしたのが始まりだといわれている。

卓球が別名テーブルテニス<sup>2)</sup>と呼ばれる由縁である。テニスも最初は屋内で始められており因縁めいたものを感じる。当初は長い柄のついた、革などを張ったバトミントンのようなラケットとコルクの球を使用したといわれる。



テニスの原型ジュ・ドゥ・ポーム

その後ラケットの柄は短くなってゆき、ヨーロッパでゴム製の一枚ラバーを張ったラケットが開発されて卓球用ラケットの主流となった。

用具や競技方法は紆余曲折を経て現在のような形にたどり着いたが、1936年頃はネットが今より高かったこともあり守備に徹した方が有利ということから、一点を取り合うのに2時間を要したというエピソードも残っている。

1926年、ドイツ・ベルリンで初めて国際大会が開催され、ヨーロッパ諸国の努力により国際卓球連盟ITTF (International Table Tennis Federation) が設立された。現在195カ国・地域が加盟している。

第二次大戦後、日本では用具の開発が盛んに行われ、それに伴って日本選手が世界を席卷した時代もあった。

現在では中国選手が世界のトップを独占している。今年(2009年)4月から5月にかけて横浜で行われた世界卓球選手権では中国選手が男・女シングルス、ダブルス、混合ダブルスのすべてで優勝を独占した。特にシングルスは男女ともベスト4を中国が独占し、また、中国から国外へ流出した選手達の活躍もめざましく中国勢の強さと層の厚さを見せつけられる結果となった。



日本も最近福原愛選手や石川佳純選手など若い力が台頭しつつある。

## ■注記

### 1) テニスと宗教との関係

これについて次のような一説がある。テニスボールを最初に打ち合ったのはエジプトの神々だといわれている。当時のエジプトの人たちは、片方が豊穡の女神イシスとオシリス神、その子のホルス神らに扮し、対する片方は悪神セトラに扮して二つのチームに分かれてボールゲームを行った。常にイシス神など豊穡の神に扮した方が勝つことになっていた。これによって豊穡を祝うとともに、悪神の志気を阻喪させるという一種の儀式がその発端だといっているのである。

### 2) ピンポンについて

ピンポンの語源と由来は1890年英国のジェームス・ギブが米国でセルロイド球を見つけて持ち帰ったことから始まる。この球を打って見たところラケットに当たれば「ピン」、テーブルに弾めば「ポン」という音を出すので、「ping-pong」としてこれを商品登録した。つまり、ピンポンの語源は商品名から生まれた。

中国では卓球を乒乓球(ピンパン・チュウ)と呼んでいる。

(参考文献 Wikipedia、語源由来辞典)



上の写真は世界女子卓球界No.1 中国の張怡寧選手。彼女は6年間ランキング世界一を維持し、アテネ、北京とオリンピックの二大会の女子シングルスで連覇した。次のロンドンオリンピックで三連覇を狙う。先ほどの横浜での世界卓球選手権でもシングルスで優勝し、圧倒的な強さを誇っている。

## 松本杏花さんの俳句「余情残心」より

謂はれ聴く虎丘斜塔の片かげり

lái yóu qīng ěr tīng  
来由倾耳听

hǔ qiū xié tǎ shuí jiā líng  
虎丘斜塔谁家陵

dān cè liú yīnyǐng  
单侧留阴影

季语：阴影、夏。

赏析：虽然在凝神聆听虎丘的故事、但人们还是不由自主地集聚在斜塔遮掩的阴影中。

此句宛如一幅速写画作、寥寥几笔、便将夏日旅游的特点惟妙惟肖地勾勒出来。主题敦厚而运笔轻灵、背景古雅而切题幽默、可谓妙作！

反り返る軒端に泰山木の花

yōu mì suǒ liú yuán  
幽谧锁留园

tíng gé qīng wǎ yán yì rán  
亭阁青瓦檐翼然

jiānduān jiē yùlán  
尖端街玉兰

季语：玉兰花、夏。

赏析：苏州园林、举世闻名。本首是作者参观留园时所作。可以看出、作者选定的咏叹对象。都是极具地方特色的。青灰色的飞檐、象牙色的玉兰花、一个古朴沉郁、一个鲜润明媚。若无敏锐的观察力和审美情趣、是捉捕不到这美景的。即使美在身边、也会熟视无睹、无动于衷。

私の住んでいる相模原市には相模川という川が流れている。毎年5月が近づくと「こどもの日」を祝う沢山の鯉のぼりが吊るされる。風を一杯にはらんで大きく揺れて泳ぐ姿に「子ども達の健やかな成長」の姿を重ねて祝う。しかし、「こどもの日」は、私が忘れてはいけない子ども達が世界中にまだ沢山いることを思い出させてくれる日でもある。

日本では、5月5日を「こどもの日」として祝うが、世界全体では、国連が定めた「世界子どもの日」が11月20日にあり、アフリカにはOAU(アフリカ統一機構)が定めた「アフリカの子どもの日」が6月16日にある。

1976年、南アフリカ共和国のソウェト地区で起こった暴動で子ども達が巻き込まれ多数が死亡したことによりOAUがアフリカの子供の命と人権を守るべく定めたのが、「アフリカの子どもの日」である。

その日から既に33年たった今、アフリカの子供たちの命や人権はきちんと守られているのだろうか？すべてのアフリカの国々の子供たちの様子を把握することはもちろん出来ないが、21世紀になった現在もなお、私が知るケニアの子供たちを例にしてみれば、子どもが子どもらしく、安心して生活できるような衣食住に恵まれている子供の数は本当に少ない。日本の子ども達のように祝福され、安心と幸運を生まれながらに与えられている子どもの数も少ない。今でも世界から取り残されたままのような子供たちの環境を思い出す。戦争・病気・貧困はストレートに子供たちに<sup>の</sup>押しかかり、犠牲を強いていると思う。

ケニアで私が目撃した子ども達の姿を思い出してみる。

- ▶ 子どもが朝から晩まで学校には行かずに働いている。
- ▶ 子どもが親が学費を払えなくなったため、荷物をまとめて寮を出される。
- ▶ 子どもが道を歩く外国人の私にお金をせがんで来るよう頼まれている。
- ▶ 子どもの居場所がなく、町の通りで眠ったり、仲間とシンナーを吸ったり、遊んでいたりする。
- ▶ 子どもが自分より小さな子供を背負って家事をしている。
- ▶ 子どもが学校の教室に数本しかない鉛筆を奪い合う。

- ▶ 子どもが鞆の代わり使っているビニールの袋が今にも破れそう。
- ▶ 子どもが大きなノートを買ってきて教科別に小さく切って使っている。
- ▶ 子どもが数日間にわたり食べ物を口にしていな。
- ▶ 子どもが制服や文房具を用意できなくて学校へ行けない。
- ▶ 子どもが数日かけて親と歩いてきた病院で、医療代が払えなくて困っている。
- ▶ 子どもがHIVの陽性である。
- ▶ 子どもが死んでしまった親が、棺を買えずしばらく埋葬できないでいる。
- ▶ 子どものあまりにも小さな棺を見送る。

このような子どもの姿が当たり前になってしまっている状況に私の胸は痛む。何故なのだ？子どもたちが生まれた場所や時代を間違ったからなのだろうか？罪のない子ども達がこのような状況に置かたまままでよいのだろうか？

私はこのような子どもの姿をケニアではいつも眼にしていた。親が居ない、親に仕事がない、理由はさまざまであるだろう。しかし、子供達は生きている。もちろん、死んでしまうこともある。命の重たさは世界中で同じであるはずなのに、子ども達はあっけなく死んでいく。WFP(国連食料計画)は、アフリカでは6秒に子供1人が、飢えやその他の原因で死亡していると報告している。

そんな1人1人の子供の人生を変えていくのは、いうまでもなくアフリカ自身の努力も不可欠であるが、自分たちの富をほんの少しだけ彼らと共有のものと考える人が増えてゆけば彼らを助けることができるし、変えられることもあるはずだ。日本人には信じられないかも知れないがほんの僅かな金銭がないために、人は十分な食も得られず死に至ることもある、という事実が多く途上国と呼ばれる国々では日常茶飯になっている。それは本当にほんの僅かな金銭があれば救われるのだ。

子供達の声はいつまでもいつまでも私の耳から離れることはなく、なにか出来ることの糸口をいつも探してしまうのである。そしていつか日本の「こどもの日」のように、世界中の全ての子どもたちが明日を心配することなく、健康で、その健やかなる成長を祝ってもらえる日が来ることを切望している。



中国に農民画と呼ばれる絵のジャンルがあります。素朴なタッチと色使いの鮮やかさが、描かれている人物や動物を愛らしくひきたてる非常にポップな絵。同時に、見る者に郷愁を感じさせる土の香りがします。

1枚1枚手描きされたこれらの絵は、農民たちが農作業の合間に筆をとって描きました。色とりどりの絵は、農民たちが楽しそうに農作業をする様子、農村の子供たちが遊んでいる姿、お正月の祝いの準備をする家庭の様子など、農村の日常の風景が季節感・生活感豊かに表現されています。

2007年には上海市政府より無形文化遺産として認定され、最近では海外からも注目されるようになりました。中国の民間芸術のひとつとして文化的な役割を期待されていますが、残念なことに心無い者たちにより偽品が観光地で売られていることもしばしば見受けられます。中国の農村地区で親から子へと受け継がれる中で花開いたこの素晴らしい芸術を守り育てている金山農民画院という、ギャラリー兼学校としての役割を果たしている施設の方々と知り合う機会を得、日本でもこの絵を民間レベルで紹介してゆこうと考えました。中国の農民画という文化を通して日中交流の可能性を拡げてゆきたいです。



中国で農民画と呼ばれるジャンルの絵は、中国各地(60か所以上ともいわれています)で発展してきた民間芸術で、その原形は年画と呼ばれるお正月用の飾り絵や剪紙(切り紙絵)だそうです。

金山(上海)の他に、陝西省、重慶市などが有名です。中には文化革命当時のプロパガンダとしての役割をしていた名残りが見られる農民画もあり、中国の歴史の潮の中で形を変えながら生き抜いてきた興味深い絵なのです。

文化革命が終わる1977年頃より、上海市の金山地区で農民画の継承を託されたリーダーたちが、金山農民画を完成させ、今日芸術としての評価を得られるまでに高めました。



©金山農民画院



©金山農民画院



©金山農民画院



©金山農民画院

新聞等でご存知の方もいらっしゃると思いますが、スリランカ北部・東北部でのLTTEとスリランカ政府軍との戦闘が終了しました。

昨年末より政府軍によって行われていた掃討作戦が、今年(2009年)5月には僅か数平方kmにすぎないLTTE最後の拠点をめぐるの局部的攻防戦になっていましたが、ついに5月17日にLTTEが自らスリランカ北部・東北部での戦闘終了を宣言しました。

これに続いて19日にはスリランカ政府もLTTE支配地域を完全制圧しリーダーのプラバカランとその腹心数名を殺害した事を発表しました。これによって26年に及んだスリランカ政府とLTTEの武力紛争は双方で7万人を越える犠牲者を出して終了しました。

ただし、LTTEとの紛争が終了しただけで、タミール人問題やシンハラナショナリズム問題が解決されたものではありません。スリランカ政府が今後のタミール人政策を誤ったり、過度のシンハラ優遇政策を執り続けると第二、第三のLTTEが出現する可能性が残されています。



さてジャフナ珍道中に話を戻しましょう。前回はLTTEの支配地域に入って、未処理地雷原に差し掛かったところで終わりました。

この地区では住人の姿は全くありませんでした。紛争の前は農地であったにも拘わらず、目に見える範囲には住居や作業小屋の跡すらも見あたりません。これらは26年間にわたる紛争で跡形も無く消え去ってしまったようです。

此処の他にもLTTE支配地域内全域に渡って地雷原は点在するのですが、道路沿いにある僕達の目でも確認できる地雷原はここだけでした。未処理の地雷が剥き出しのまま放置されている現場を目撃する事ができたのは貴重な経験でした。さらに良かったのは道路が舗装されていたおかげで、LTTEの監視員の姿を気にしながらも制限速度を無視して突っ走る事ができたので、チェックポイントを通る際に生じた遅れを取り戻したばかりか更に若干の余裕が出来た事です。

地雷原を通過すると小さな集落が次々と出現し、住人達の姿も見られるようになりました。子供達は戦場での生活しか知らないにも拘わらず屈託無く遊んでいます。でも、どう見ても就学年齢に達している子供が含まれています。平日の真昼間から家で遊んでいるなんて変です。こ

の集落からほんの数kmだけコロombo側に戻れば同世代の子供達が学校に通っています、ここの子供達が通うことの出来る学校があるのか心配になってきました。

集落とはいっても椰子の葉で屋根を葺いた小屋ばかりです。LTTEのチェックポイントを通過する際に言い渡された注意事項の中には、住人と話をしてはいけないと言う項目もあったのですが、同行のカルナラトネ君が監視員の目を盗んで片言のタミール語で聞き出したところでは、先程の地雷原を追われた人達の集落でした。ほとんど情報を聞き出す事は出来ませんでした。衣食住は確保されているようです。農地には地雷が残っていて耕作は出来ないだろうし、衣類や食糧を得るためのお金を得る手段は何も無さそうです。推測ですが、各国からの救援物資を頼りにしているのでしょう。コロomboで聞いていた話ではLTTEが救援物資をピンハネしていて末端まで物資が渡っていないと言う事でした。紛争中はどうか知るか術もありませんが、休戦に入った現時点では末端の小さな集落まで物資はいき渡っているようです。

LTTE支配地域内で印象的だったのは、このような集落の前後や道路が分かれる箇所には決まったように、銃を持ったLTTEの兵士の姿と士気を煽るためのスローガンを書いた看板と、LTTEが要求している領土の模型がある事でした。紛争中にはこの看板は兵士の募集に使われていたそうです。領土の模型にはスリランカ北部・東部の大部分が含まれています。

地雷原を抜けると道路はもとのデコボコ道に戻ってしまいました。反対側のチェックポイントまで残り65kmほどのところまで来ると、道路から少し入った所に人だかりのしている小さな店を発見しました。北部名物のパルミラ椰子から造った密造酒売りの店です。

周囲に監視員がいないのを確認して同行の二人は嬉しそうに、先程の舗装道路で時間を稼いだから少しだけ休憩していこうと言い始めました。店に入ると先客達が胡散臭そうにこちらを見ていましたが、そこは飲兵衛<sup>のんべい</sup>同士です。すぐにタミール語とシンハラ語のチャンポンの会話が弾んでいます。

僕はどちらの言葉も判らないので、集まっている人達を観察しながら、密造酒を呑む以外にする事はありません。集まっている人達の衣服は新しい物に見えました。乗って来た自転車やオートバイもかなり新しいものでした。先程の集落でも感じたように物資はいき渡っているようです。





パルミラ椰子から造った密造酒売りの店。発酵しすぎた乳酸飲料のような味でかなり強い。手前に駐車しているオートバイの後輪泥除けに注目。見慣れた郵便局マークが見えます。日本の郵政省(当時)が払い下げたオートバイで耐久性が良いためスリランカで大人気

先客のうちの一人が乗ってきた赤いオートバイを見て驚きました。後輪の泥除けに郵便局のマークがあります。これは、日本の郵政省が払い下げた集配用のオートバイだそうです。スリランカのLTTE支配地内でお馴染みのオートバイにお目に掛かるなんて驚きます。

さて、密造酒は発酵しすぎた乳酸飲料のように甘酸っぱ

く、アルコール度数はかなり強いものでした。古びたバケツから縁の欠けたコップやプラスチックのカップに注がれてサービスされます。かすかに白濁した密造酒の表面には椰子の葉の破片なのかゴミなのか何やら判らない物が浮いています。アルコール消毒しているから大丈夫だろうと思い飲んでみると、最初はあまり美味しく感じませんでした。杯を重ねるうちには味はどうでも良くなり、調子に乗って言葉もわからないのに会話に割り込んで皆に密造酒を振舞いはじめるしまつです。

酒と楽しい会話を楽しんでいるうちに時間のたつのを忘れてしまい、気が付けば3時を過ぎています。タイムリミットの5時までにチェックポイントを通過するにはギリギリの時間しか

残っていません。大慌てで店を飛び出そうとすると、先客達が密造酒をペットボトルに入れてお土産として持たせてくれました。

別れの挨拶もそこそこに、恐らくは二度と会う事はないだろう人々を後に店を飛び出しました。(続く)

## ‘わりい’ おたより会員の皆様、そして 入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。途中入会は、入会月によっては割引があります。詳細は事務局にお問合せを。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりい’を発行し、情報の交換に努めています。

- ▲入会はいつでも歓迎しています。
- ▲入会すると‘わりい’の全ての活動に参加できます。
- ▲活動の様子は、おたより又は‘わりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

jǐ dù huā luò shí  
几度花落时  
(cǎiyún zhuī yuè)  
(彩云追月)

páihuái huācóng lǐ  
徘徊花丛里  
qíng rén ya bù lái  
情人呀不来  
chīchī zài děngdài  
痴痴在等待  
mòfēi nǐ bǎ wǒ wàng huái  
莫非你把我忘怀  
nà nián huā luò shí  
那年花落时  
xiāng yuē zài jīn rì  
相约在今日  
kě shì ya bù jiàn nǐ lái  
可是呀不见你来

céng wèn nà huā er wǒ xīn shì  
曾问那花儿我心事  
kě zhī wǒ xiāng sī kǔ  
可知我相思苦  
suí nà liú shuǐ ya jì gěi nǐ  
随那流水呀寄给你  
zài wèn jǐ dù huā luò shí  
再问几度花落时

2007年3月、ラオスの、山のモン族の村に、「ラオス・山の子ども文庫基金」の念願が稔って、山の子ども文庫「太郎の図書館」が完成し(‘わんりい’123号参照)、活動がはじまりました。以来、「基金」代表の安井清子さんは、年に3、4回くらい現地を訪ねて様子を報告されています。以下は、2009年3月の滞在日記です。

### ❁2009年3月5日(木) 村に到着

G村へ。市場ですぐ車が見つかり、交渉。すぐに村に入れた。サイガウ爺の家。同居している爺さんの甥っ子、ピーに娘が生まれていてびっくり。3か月前に、奥さんのお腹、そんなに大きくなかったから、まだまだ先かと思っていた。わぁびっくり。もう赤ちゃんは1か月以上になったようだ。

爺さんの亡くなった末息子の嫁、ニアワが再婚した。モンの人々の習慣で、未亡人の嫁が、再婚する時には、元夫の両親に、ごちそうをふるまうものらしい。ニアワは、娘のナリーと、現夫を連れてきて、豚をしゃめてのごちそうをふるまったという。彼らは、遠いトーナミー(？カムアン県？)に住む。ナリーはおかあさんから離されるのをとても怖がっていて、そそくさと帰ったという。

あまりに、爺さんの家とおかあさんの間を行ったり来たりしたせいで。もうナリーに会えないことはさびしいけれど、それは仕方ない。ニアワは、3人の実子のうち、息子二人を爺さんの家に置き、娘だけ連れて、再婚した。モンはそういうものなのである。

爺さんの娘、シェンはさびしうに「彼女にあげたわ」と言った。シェンは、ニアワが子どもを3人とも爺さんの家に置いて、家を出ていた時、本当の娘同様にナリーをかわいがっていた。私でさえ、もうナリーに会えないと思うとさびしいのに、彼らにとっては、それは辛いだろう。お兄ちゃんのトゥローに「ブ・ンジョー・ナリー？(ナリーが恋しい?)」と聞くと、一言、「ンジョー(恋しいよ)」と言った。



昨年の今頃、みんな、ござって、トウモロコシを植えていたのである。ベトナムからの買い付けが増え、値段が上がる・・・という噂が流れたからである。みな、ベトナムから輸入されたトウモロコシの種(すでに消毒され、ビニール袋の中に入っている。一代限りの種)を買い、除草剤を使って、新たに畑を開き、誰彼もが、トウモロコシ!!だったのである。

今年は、みんな「トウモロコシはポンペン(損する)から、自家用の、豚のえさ用にモンのととうもろこしだけを作るよ」という人が多い。結局、値がうわさのように上がらなかったのである。例年通り、1kg1000キップくらいの値しかつかなかった。種や除草剤に投資した分、損した人が多かったという。

「ベトナムの種のトウモロコシは、まずいんだよ。ブタですら、食べないんだ」

「ブタも食べなかったら、何にするんだろうね？」

「さあ、お菓子でも作るんだろう？」

「ブタが食べないんだったら、お菓子作ってもまずいでしょ？」

「さあ、ベトナムで何にしてるか、わからんよ」

私は、数年前にベトナムに行った時、とにかく、見渡す限りのトウモロコシ畑を見て、びっくりしたのであったが、そんなにまずいトウモロコシだったら、やはりエタノールにするの

であろうか？

彼らがトウモロコシで儲けられなかったのは残念ではあるが、除草剤を使って、一面のトウモロコシ畑になるのも、ちょっと考えもの・・・と思っていたから、なんだかホッとしてしまった。

### ❁2009年3月6日(金) 図書館開館日

ツィアとマイワは、まじめにやってくれて、ほっとした。

今回、私は、たくさん新しい本を購入して持ってきた。それを、さっそく二人で、登録作業をしている。よっぽど一生懸命やったのだろう。登録をほぼ書き終えたツィアは、やっと顔をあげて、「ああ、本当に一生懸命やったわ」と満足そうに言った。

マイワは途中からは、子どもたちにせがまれてお話をしやっていた。子どもたちは、10時頃か、学校が終わったころにたくさん押し寄せてきたし、人数の少ない午前中は、何人かがとてもゆっくり本を見ていた。これでよいのだと思う。

ツィアは「パヌンがいる時は、登録なんか集中できてうれしいわ」と言うので、私は私で一生懸命子どもたちに話をしていた。

私は途中、サイガウ婆さんに「パヌン、ちょっと手伝っておくれ」と呼ばれ、トゥアツウ・・・米を足踏み脱穀機でつきに行った。婆さんは、カンナの芋みたいな芋と米粉をまぜて餅を作っているのである。

図書館にいた、まだ小学校に行っていない小さな女の子二人が、手伝ってくれた。ひたすら足踏みをして、結構疲れたのであるが、お婆さんに「あんた、疲れたろう。私が足踏みでつくから、あんたは米をまぜなさい」と言われても、あの足の痛いお婆さんに代わるわけにゃいかんと、「大丈夫、大丈夫」と言って、必死に平気を装って、足踏み脱穀機を踏んだのであった。

やりながら、図書館の仕事中に、足踏み脱穀に駆り出される自分が妙におかしくて、「こういう生活の中の図書館なんだよなあ・・・私が面白いと思っているのは・・・生活から切り離された場所であってはいけないんだよなあ」とか思ったわけである。

まあ、そんなことわざわざ言わずとも、この図書館は、生





活と密接している図書館である。

### ❀3月7日(土) 土曜日のあれこれ

朝、乗合トラックに乗って、市場へ。買いもの。

昨年まで小学校の教師だったニアエンが教師をやめて車を買ひ、商売をはじめている。あれこれ仕入れてきては、売っているようだ。ノンハートの市場で車を止めて、スイカと菓なんかを売っていた。もちろん、その方が金になるんだろうけれど。帰りはそのニアエンの車の荷台に、大勢の人々とともに乗せてもらう。

荷台。あっちにもこっちにも、赤ん坊を抱く若い母親たち。

「パナン、結婚したんだって?」「うん、そうだよ」「パナン、結婚したら、赤ん坊ができて、家から離れられないもんだよ、それなのに、あんたは どうして一人でここに來てるの?」と言う。

ははは・・・彼女たちにとっては、私が一人で、相も変わらず、ふらふらと村にやってくるのが不思議なのだろう。

女は、男の妻となり、子を産み、家にいるものなのだろう・・・

「でも、あんまり一緒にいると、けんかばかりしているから、離れていると、思いあうからその方がいいかもね・・・」

と彼女たちは言う。

この時期、爺さんの家の庭の野菜は枯れていて食べるものがない。市場で豆腐と、「ジャオンジュア」青菜をたくさん買った。しばらく食べるものがあると思うと、少しほっとする。



夕方4時頃か、少年たち、ケエ、メドン、クーミエンにくっついて、チュアナア、ねずみわなを仕掛けに行く。もちろん、私はカメラとビデオを抱えてついていくので、ねずみわなを仕掛けるわけではないが・・・もうすぐ夕暮れ、暗くなったらやばいぞ、私はモンの子みたいには暗い中歩けないもの・・・少し不安な気持ちを抱えつつ、でも、ついていく。

途中、農作業から村へと戻っていく人々に出会う。かごを背負った子どもたち、水牛に乗った人たち・・・みんな、「パナン、どこ行くの?」と聞く。「ねずみとり仕掛けに」と笑って答えると、「もう暗くなるよ」と。

そうだ・・・暗くなったらどうするのだ? 分別のある大人だったら引返すだろう? あんた、いったいいくつだと思ってるの? と自分に言いつつ、でも、なんだか歩くにつれ、自分の中にしばらく眠っていた何かが、・・・少しわくわくする何かが・・・起き上がってくる気がした。

こここのところ運動不足とか年だとか・・・なんだか体がなまっている気がしていたが、子どもたちについて、どんどん、容赦なく歩いて、久し振りに、血がめぐってくる気がした。少年たちのいいところは、彼らは容赦しないことである。もちろん、それに、山の子どもたちは、ある信頼に足るものを持っているから、「最後まで連れていってくれる」という信じられるものを持っているから、私もついていくのであるが、大人みたいに「無難に、もういい加減に、やめといたら」ということがないので、だから面白いのである。

もう日は傾いている。ケエを先頭に、ネズミ罠を持った彼らは、どんどん行く! 行く! 途中ですれ違った、もうすっかり青年になった、元少年が「もうすぐ暗くなるよ」という。そうだ、でも、どうしよう・・・ここまで来たら行くしかない。運



動靴もはいてこなかった。サンダルである。はいてくればよかった・・・もう遅い。

「暗くなったら、私歩けないよお。どこまで行くのよお」

ケエはわざと「向こうの、山のもっと向こうだよ」

「ええ～～、それなら行かない」

「うそだよ」

いつのまにか、図書館に入っている日本の絵本、「三枚のお札」の話になる。小僧さんが山に花をつみにいくと、暗くなって迷子になってしまいました。小さな家があって泊めてもらいました。夜中にふと目が覚めると、山姥が、おしりをペロンペロンと・・・とメドンとケエが楽しそうに話しながら行く。

この山を歩いていると、本当に同じシチュエーション、今の日本の子どもたちにはただのお話でしかないだろうけれど、ここでは、ある実感をもって、その昔話を捉えられるのである。お話と生活が重なる。

予想はしていたが・・・下草を焼いた後の山の斜面を登るのは、やぶこぎ・・・である。しかも焼け跡だから、真っ黒になる。もう、ジーパンも手も真っ黒。少しずつ暗くなってきている。特に、木々の中に入ると暗い。私も必死に目をこらし、必死に歩くにつれ、段々自分の危険意識というか、自分の中のどこかにある、自分のことを自分で守る力・・・みたいのが少しだけ芽生えてくるのを感じた。

日々、こんな生活しているのだから、モンの子どもたちは強くなる・・・というか、生命感にあふれているはずである。ある意味では、命をかけて生活しているんだから。日本人に今、うんと欠けているのはそれなのだろう・・・と思う。日々の生活の中に、それが無い。まあ、異常な状況の危険さはあるのであるが・・・自然の中で生き抜く場面がないのである。山道でも、たいていが、道しるべのある、決められた道を歩く。そうじゃない、こんな道なき道を歩くことがない。ねずみとりの少年たちについて、木の枝ををくぐって歩くうちに、少しだけ、そんな感覚が戻ってきて、私は元気になってくる気がしたのだ。

それにしても、少年たちは私のことを気にしているんだけど、どんどんすたすたいってしまう。最後は、カメラもビデオもしまいこんで、必死。最後の斜面は、彼らは道をごろごろと転げ落ち、私はお尻で滑り落ちて、下のまともな道について、ワァ～助かったあ・・・と、夕方真っ暗になるぎりぎり、私たちは走って村まで戻ったのである。

私の中の「夏の少年」が、また、目を覚ました気がした。それは愉快だった。

夏の日の少年のエネルギー

はじけるような命のきらめき

少年が少年たるこの一瞬

(続く)

いつの日にか・・・と心待ちにしていた日がついにやってきた。

私の心の中にずっと沈んでいた青い湖・・・深く心に刻まれていたはずの思い出の風景は、雑多な日本の生活の中で思い起こすにはあまりにも現実感がないものだった。仕事に追われ、日常に埋もれて、時が経つにつれ希薄になっていく思い出は、いつしか空想の出来事だったような気さえし始めていた。氷河を頂く岩山に囲まれた、宝石の輝きを持つ湖なんて本当にあったのだろうか・・・？それを確かめに行ける日がついにやってきたのだ。

昨日の夕暮れには泣きたいような気持ちで走り回っていた林の道を、今日は思いがけず道中を共にする事になった学生グループ達とにぎやかに語り合いながらウキウキと辿っていた。

私は季節があと一ヶ月早ければ、この辺りは一面に可憐な高山植物の花園になっているのだとくどいほどに繰り返しながら、天候に恵まれてさえいれば目の前に聳えているはずの央邁勇<sup>ヤンマイヨン</sup>が見えないことが残念でたまらなかった。まるで自分がネイチャーガイドにでもなっているような気分で、この土地の美しさを訪れる人達に少しでも多く知ってもらいたい気持ちでいっぱいだったのだ。

昨日ウィンが座り込んでいた花園広場を過ぎるとそれまで続いていた林は途切れ、岩の上を乗り越えながら歩く崖下の道に変わった。朝日に照らされて大勢の仲間とにぎやかに歩いていると、昨日は風に揺れるタルチョがまるで魔境への入り口を示す道標のように薄気味悪く感じられ、不安に締め付けられながらこの道を走っていた事が嘘のようだ。

歩く速度と同じ速さでゆるやかに移り変わってゆく景色を楽しみながら歩を進めると、央邁勇に近づくにつれて徐々に風景が迫力を増してくる。すると唐突に奥の湿原が眼下に広がる崖の上で道は終わってしまうのだ。湿原を挟んだ対岸は既に央邁勇の裾野にあたり、氷河から岩肌を伝い流れ落ちてくる滝が目の前でザワザワと音を立てていた。

「うわぁ～、綺麗な場所だなぁ～！」一緒に歩いていた青年が歓声を上げた。みんなが声を上げてこの土地の美しさを褒める言葉を聞いていると、私は自分の故郷でもないくせに、「そうでしょう～」となんだか得意気な気分になったが、しかし内心不満だった。

「でも、本当はもっともって綺麗なのよ～!! もし、雲が無ければあそこに雪山がどーんと聳えているの！一ヶ月前だったら、この湿原は花がいっぱいのよ!!」

言っても仕方の無い事だとは判っているが、どうしても言わずにはいられない。何度言っても言い足りない気分だ。せめて昨日の夕暮れに私が見た央邁勇<sup>ヤンマイヨン</sup>の風景を彼らに伝えたいと思ったが、自然の美しさを言葉で伝えようとしたところで、それは実際に見た者にしか判らないことだ。私がおせっかいな口を挟まなくとも、青年達は目の前に広がる亜丁の自然を十分楽しんでいるようだった。道の切れた所から低い崖を下り湿原に降りると、所々ズブズブになっている場所には丸太や木の枝が転がしてあった。その上を綱渡りのようにそろそろと歩きながら湿原を横切れるようになっているのは三年前とまったく変わっていない。

「みんな気をつけて!! もし落ちたらドロドロよ～!!」

湿原を目の前にして、私は必要以上に張り切っていた。実はこの旅の目的地が亜丁に定まった時から、この瞬間が来るのをずっと心待ちにしていた理由があったのだ。

ウィンや学生達がバランスを崩したり足をすべらせたりして泥の中に足を突っ込み、靴の中に水が入ったなどとキャアキャア騒いでいるのを尻目に、私は平然と靴が泥にとられるのも省みずズブズブの泥の中をくるぶしまで泥水に漬かりながらスイスイと歩いた。ああ～快感!! そんな私の姿を見た青年の一人が声をかけて来た。

「君の靴は水がしみないのかい？」

「私の靴は防水の登山靴だから、こんな場所を歩いても全然問題ないの」

内心の得意満面な気分を隠すと私は平然とそう答えた。

三年前にこの湿原を渡った時の思い出が胸の中に甦る。あの頃の私はアウトドア用の靴も知識も持ち合わせておらず、亜丁に来るのにも踵が高くスタイルが良く見えるように作られた、街用のおしゃれスニーカーを履いて来ていたのだ。安定も悪く、滑り止めなど効いていないタウンシューズでヨロケながら泥の中に足を突っ込んで靴下が濡れたと悲鳴をあげている私の脇を、案内人の烏里氏が平然とザバザバ歩いているのを見た私は、先程の青年と全く同じ質問をしたものだ。

たまたま機会が得られていなかっただけで元々はアウトドア志向の好みを持つ私は、そこで烏里氏の防水の利いたトレッキングシューズにたく感銘を受けると、自分もあんな靴を手に入れてやろうと、その時密かに決意を固めていたのだ。

亜丁から戻ると再び都会型の生活にうずもれていた私に、トレッキングシューズ購入の機会はなかなか訪れなかったが、翌年急に富士山に登る気になった。



夏が来るたびにアウトドア系の雑誌で約束事のように組まれる富士登山の特集を本屋で立ち読みしていた私は、しっかりと広告主の策略にはまり、富士登山に向けてのトレッキングシューズが紹介されているページに強く興味を引かれていた。

シーズンともなれば小学生でもゾロゾロ登山に行く富士山に、特に靴など準備する必要はなかつただろうが、普通のスニーカーさえまともに持っていなかった私は雑誌で紹介されていた手頃な価格のトレッキングシューズに心をひかれ、自宅の近所にあった登山用品店に足を運んでみたのだ。初めて訪れた店の中で、思いがけず値段もデザインも様々な登山靴の棚を目の前にしばし途方にくれていると、白髪頭の店員がぶっさら棒な調子で声をかけて来た。

「靴ってのは目的によって全然違うんだよ。あんた何処に行くつもりなの!？」

「富士山に」

「富士山に行くためだけなら別にこんな靴買う必要ないよ」

「これから他の山にも行ってみたいと思っているから」

「他ってどこに？」

「さあ、まだ判らないけど・・・湿原とか。この辺まで水に浸かっても平気な靴が欲しいの」

私は、これだけは譲れないといった調子でくるぶしの辺りを指差して見せた。脳裏には亜丁の湿原の風景が広がっていた。

「何処に行くか判らないんじゃ、しょうがねえなあ・・・」

白髪頭の店員は私のささやかな希望には全く取り合わない調子で苦笑すると、

「じゃ、とりあえずこの辺のを履いてみな」

と棚に並んでいた中から取り出した靴を放り出すように私に差し出した。

店の店員というよりは「口の悪い山のオヤジ」といった雰囲気だった。毒舌ながらも愛情が感じられる物言いには親しみが感じられ、私は学校の先生に叱られる様にしながら何足もの登山靴を試し履きし、2時間近くもかけてやっと一足の登山靴を選び出したのだ。お手頃な金額で適当な一足を購入するつもりだったトレッキングシューズは、いつの間にオヤジの口車に乗せられたのか、当初の予算を大幅にオーバーした本格的な登山靴に変わり、私にはだいが高い買い物になったのだが妙に嬉しかった。

思いがけずに購入してしまった高価な一足は、履かなきゃ損だとばかりに日本最高峰の富士山で勢いづいた私は、その二ヵ月後に旅行で訪れたマレーシアで東南アジアの最高峰であるキナバル山(標高4,095.2m)に登った。ボルネオ島のジャングルトレッ

キングで岩をよじ登り、鍾乳洞を這いずり、ぬかるんだ熱帯雨林気候の森の中を歩き回った時は、つくづくこの靴を買っておいて良かったと思ったものだ。

しかしなぜだか日本の山には何処に行ってもよいのか判らずにいて、一年近く寝かせて置いた登山靴を久しぶりに引っ張り出してきたのが今回の旅のきっかけとなった、私の登山歴史上最高峰の大姑娘(標高5025m)だ。出番の回数でいえばまだまだ少なくとも、高さだけは高い山を渡り歩いてきた私の登山靴だったが、購入の際に目的地として唯一イメージしていたのはこの亜丁の湿原だった。

何の計画も無く、勢いだけでやって来た今回の亜丁だが、結果的にはこの場所を歩くために買った靴を履いて、この湿原に帰ってくる事ができた訳なのだった。私は靴が汚れるのも厭わずに、半ばわざと泥に浸かるような歩き方をしながら、改めてずっと願っていた亜丁再訪がかなった喜びをかみしめていた。

湿原を横切ると、そこからはいよいよ湖に至る登山の開始だ。前回の胸が張り裂けそうだった苦しさを思い返すと武者震いが出る思いがしたが、実際に登山してみると記憶にある苦しさとは比べ、さほどではない。やはり今回の旅で大姑娘山を先に体験しているために既に高度順応しているのだろう。体力にゆとりが持てる分だけ景色が良く見える。懐かしい記憶の通りに現れる風景や岩のひとつひとつに愛着が感じられた。

高度が上がり、山の樹木が途切れ始めたところから岩場の急登が始まる。この登山では一番苦しいところだが、私にとっては思い出の少年に励まされながら二人で登った懐かしい道だ。

昨日は宿探しのドタバタ劇で少し薄れていた少年との再会の感激が再び込み上げてきたが、フッとその感激に影をさすようなその他の出来事が胸をよぎる。・・・この三年間、亜丁へ思いをはせる度に幾度彼の事を想ってきただろう。三年分成長した少年との再会は、思わず我を忘れる程に嬉しかった。でも・・・彼もこの村の人間である限り、他の村人達と同じように私達旅行者からはお金を得る事ばかり考えているのだろうか。私と並んで無邪気そうに笑っていた少年の笑顔が目には浮かんだ。あなたもそうなの・・・？

急登の岩道で無口になった私は、口の中で少年の名前を転がしながら一步一步岩を踏みしめて山を登った。

「到了～!!!」

山の頂上の入り口に辿り着いた時、私は両手を広げると叫び声をあげた。前回ここを訪れた時に横に並んでいた少年が、この場でそう叫んでいたのを思い出したのだ。

一緒に登ってきた学生軍団の青年達が歓声を上げ後ろを振り返ると「着いたぞ～!!」と声を上げて後続の仲間  
に終点を知らせた。

懐かしい天国の湖は私の記憶の風景と何も変わって  
いなかった。荒涼とした風景に囲まれて、氷河を頂く岩  
山から流れ落ちてくる細い滝に水の表を震わせて揺れ  
ている鮮やかな青い湖。

やっぱり幻なんかじゃなかったんだ・・・  
だが本当に残念な事に、朝は日差しが射していたはずの  
空はいつの間にか湧いてきた雲に覆われて灰色に垂れ  
込めていた。

あの日の私が思わず息を飲み、呆然と立ち尽くして眺  
めた宝石の輝きを持つ湖は、牛奶海の水の色と太陽の光  
とが合わさって創りあげられた自然の芸術品だ。曇り空  
の下で眺めても鮮やかに青い牛奶海は十分に美しかっ

たが、せっかくここまでやってきたウィンや学生達には、  
あの湖底から燐光を放って燃え上がる水色に、ダイヤモ  
ンドの欠片が散りばめられているような牛奶海を見せて  
あげたかった。

お願い、一瞬だけでもいいから日が射して・・・

祈りは天まで届かず、私の心の中に沈んでいた輝く宝  
石の湖は、やはり半分は幻のままだった。 (続く)

### 【‘わんりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わん  
りい’は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体  
験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話など  
など気楽にお寄せいただければと願っています。

\* 紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。ま  
た、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさ  
せて頂いたりすることもあります。

## 《‘わんりい’掲示板》

### 四川リアリズム～30年を経て～ 「四川美術学院現代絵画展」入場 無料 四川美術学院の現代絵画 約80点を展示



《2007- 大家族》 張曉剛 2007



嫌食主義者宣言No1  
張奇勤

文革終結・改革開放以来、中国美術界を牽引し  
てきた四川・西南地方の画家達。何故内陸部に  
住む彼らが一目置かれてきたのか

於：日中友好会館美術館・大ホール 〒112-0004  
文京区後楽 1-5-3 都営大江戸線・飯田橋C3出口・徒歩約1分  
JR飯田橋・徒歩7分、丸ノ内線・後楽園駅・徒歩10分

2009年7月25日(土)～8月19日(水) 10時～17時  
(毎週金曜は19時まで開館/休館日：毎週月曜日)

主 催：財団法人日中友好会館、四川美術学院  
後 援：中国大使館、社団法人日中友好協会ほか

- ギャラリートーク：7月25日(土) 15:00～(約40分)  
※ 来日した四川画家(予定)による解説を予定。  
※ 申込み不要 直接会場へお集まりください。
- ◆ お問合せ：03-3815-5085(文化事業部)

### 心に響く古箏の調べ♪第3回フレンドリーコンサート (いとのえにし) 弦之縁・アンコールコンサート

2009年9月5日(土) 14:00 開演 (13:30 開場)  
サンハート音楽ホール(横浜市旭区民文化センター)  
URL <http://www.yaf.or.jp/sunheart/index.php>  
横浜市旭区二俣川1-3 二俣川ライフ5F  
☎ 045-364-3810

【交通】相鉄線「二俣川」駅下車 徒歩2分 ※ 駐車場なし

- ◆ 友情出演：西本梨江(ピアノ) <sup>にしもとりえ</sup> 馬平(中国打楽器) <sup>マーピン</sup>
- ◆ 参加費：4,000(前売) \4,500(当日) 自由席

#### 【予定演奏曲目】

風のように / 東海漁歌 / Tears Of The Moon /  
アベマリア / アンダルーサ /  
歌劇「セピリアの理髪師」序曲 / 童謡メドレー 他

【主催】 姜小青フレンドリーコンサート実行委員会

- ◆ 申込み：名前・住所・枚数を書いて、  
できるだけ ファックス、または E-mail で。

E-mail: [xianzhiyuan\\_hz@ybb.ne.jp](mailto:xianzhiyuan_hz@ybb.ne.jp)  
Fax: 045-313-5188

(申込 & 問い合わせ)  
☎: 080-1304-7347



### 【7月の定例会】 7月13日(月) 13:30～ 田井宅

- 8月のおたよりの発送はありません。どうぞお元気で楽しい思い出いっぱいの夏をお過ごしください。